

「歓送の辞」

中林太美世氏（佐保会員） 令和8年3月24日

卒業生の皆様および保護者の皆様、本日は誠におめでとうございます。

佐保会大阪支部の中林太美世と申します。本日は、母校奈良女子大学卒業式において、皆様の門出にあたり歓送の辞を述べる機会をいただき、大変光栄に存じます。

皆さんは今、社会へ踏み出す入口に立ち、期待とともに不安も感じておられるのではないのでしょうか。近年は生成AIが進化し、レポートや翻訳、研究の補助などに活用される時代になりました。もしかすると、そのような生成AIに自分の進路について問いかけてみた方もいらっしゃるかもしれません。しかし、どれほど技術が進化しても、「自分の進む道」だけは教えてくれません。何に心を動かされ、何を大切にしたいのか。その答えは、自分自身で選び、試行錯誤しながら見つけていくものです。

私自身、就職の際に選んだのは、幼い頃から憧れた教師ではなく、民間企業で技術者としてものづくりに携わる道でした。当時、男女雇用機会均等法の第一世代として、男性と同じように働き、同じように給与を得て、ITをしなやかに使いこなす先輩女性たちの姿に強く惹かれたからです。

電機メーカーに入社後は、半導体の開発に従事しました。入社当時、半導体は電子産業の中の一分野でしたが、やがて、自動車や医療機器、家電など、多様な分野に広がり、暮らしの中に溶け込んでいきました。社会に役立つ技術が、目に見えないほど小さなところから生まれ、暮らしの中で形になっていく。その現場に立ち会う中で、ものづくりの魅力に惹かれていきました。しかし、その道のりは決して平坦ではありません。失敗を重ね、何度も壁にぶつか

りましたが、多くの人との出会いに支えられ、好奇心と探究心を持ち続けることができました。困難に直面したときこそ、人とのつながりと、知りたいという気持ちが次の一歩を支えてくれる、それが私の学びです。一人で頑張るのではなく、つながりの中で成長していくことの大切さを実感しています。

その後、人生百年時代の後半に差し掛かる頃、キャリアの途中で進路を見直し、研究・教育の分野へと転じました。転職を重ねる中で、「今の自分にとってベストか」「社会にとって価値があるか」を問い続けてきました。ここでお伝えしたいのは、キャリアにはあらかじめ用意された正解はないということです。選んだ道が正しかったかどうかは後から決まるのではなく、自分がその選択をどのように意味づけていくかによって形づくられていきます。

かつて、教育・仕事・引退という三つのステージで人生を考えるのが一般的でした。しかし今は、年齢にとらわれず学び直し、働き方を変え、何度でも新しい役割に挑戦できるマルチステージの時代です。皆さんの未来もまた、一つに決まるものではなく、これから何度でも描き直すことができます。これからの人生には、正解のない選択が数多く待っています。迷いや遠回りもあるでしょう。しかし、その一つ一つの経験が、やがて自分だけの物語となり、誰にも代えることのできない自分だけの価値になります。どうか、自分の好奇心と、心に生まれる問いを大切にしながら、しなやかに、そして勇気をもって未来を切り拓いていってください。皆様のこれからの歩みが社会をより良くし、次の世代へとつながっていくことを心から願っております。